

和をはかった雑草防除体系を検討する必要がある。“雑草管理学”の確立を望んでよいのではないだろうか。筆者は、さらに押し進めて“雑草利用学”も夢みている。厳密に言えば、雑草ではなくなるのだが……。

以上の立場から、ホテイアオイは恰好の研究材料と考えている。いずれにしろ、雑草学は時代に敏感に反応して成長しなければ存在価値が薄れるであろう。水草研究会

の会員の方々からも今後、雑草学に関心を抱いて頂き、色々御指導願いたいと紙面をお借りして念じる次第である。

さて、時代の落し子であるホテイアオイについて、今回は、この植物が置かれている状況を簡単に御紹介した。次回からは諸外国での本草の現況報告もまじえて、分布・雑草害・防除法・生育特性・利用化等の各論に筆を運ぼうと思う。(つづく)

北限のオオカナダモの分布状況について

青森県, 1980.

青森県立三沢高校 大 沢 達 郎

はじめに

1980年8月23日に、青森県上北町において、オオカナダモ、トチカガミ科 (*Egeria densa* (Planch.) Casp., Hydrocharitaceae) が採集された。同定は大滝末男氏によりなされた。大滝・石戸(1980)によると、北海道には分布しない。また、青森県内における採集の記録はない。北限の新産地と思われる。

調査について

オオカナダモはアルゼンチン原産の、沈水性の帰化植物であるが、その北限の分布状況が、後述の通りに予備的に調査された。なお、調査は筆者一人により行なわれた。

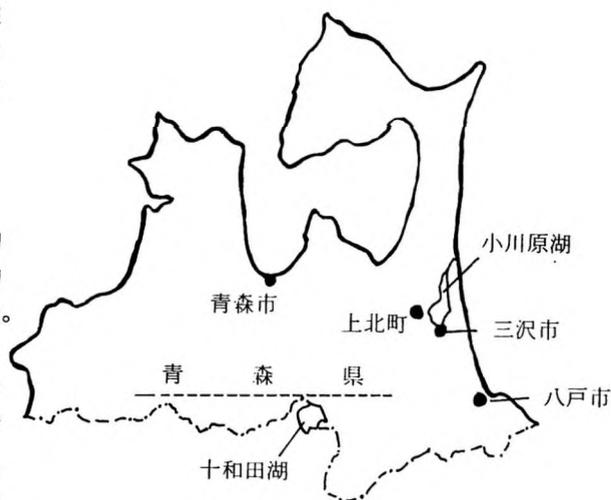
日時：1980(昭和55)年9月3日。

場所：青森県上北郡上北町にある、長さ約1.3kmの水田排水路。花切川を経て、小川原湖へ流入する。以下「花切川排水路」と仮称される。図1.2.

方法：花切川排水路にかかる全ての橋に対して、地点ナンバー(No.1~9)が与えられた。その位置は現地調査に基づき、慎重に1/25000地図上に記録された。水温は同一の棒状アルコール温度計により、川の中程の表面水温が測定された。PHは1~11まで測定可能な、万能PH1~11(東洋濾紙KK)用紙により、その場で測定された。

参考：調査の前の一か月間程は、毎日のように雨が降り続いた。

上北町位置図



結果および考察

オオカナダモは、No.7から9までの約300mに渡り分布していた。被度は85~90%で、川幅5.5mのほとんどを埋める純群落である。底質は腐泥、水質は透明、深さは約50cmで流れはほとんどない。

受光量について：No.1から9の全区間に渡り、ソメイヨシノの桜並木が岸に分布する。No.1~6までは、並木は排水路の湖側のみに分布する。川面には直射日光が当

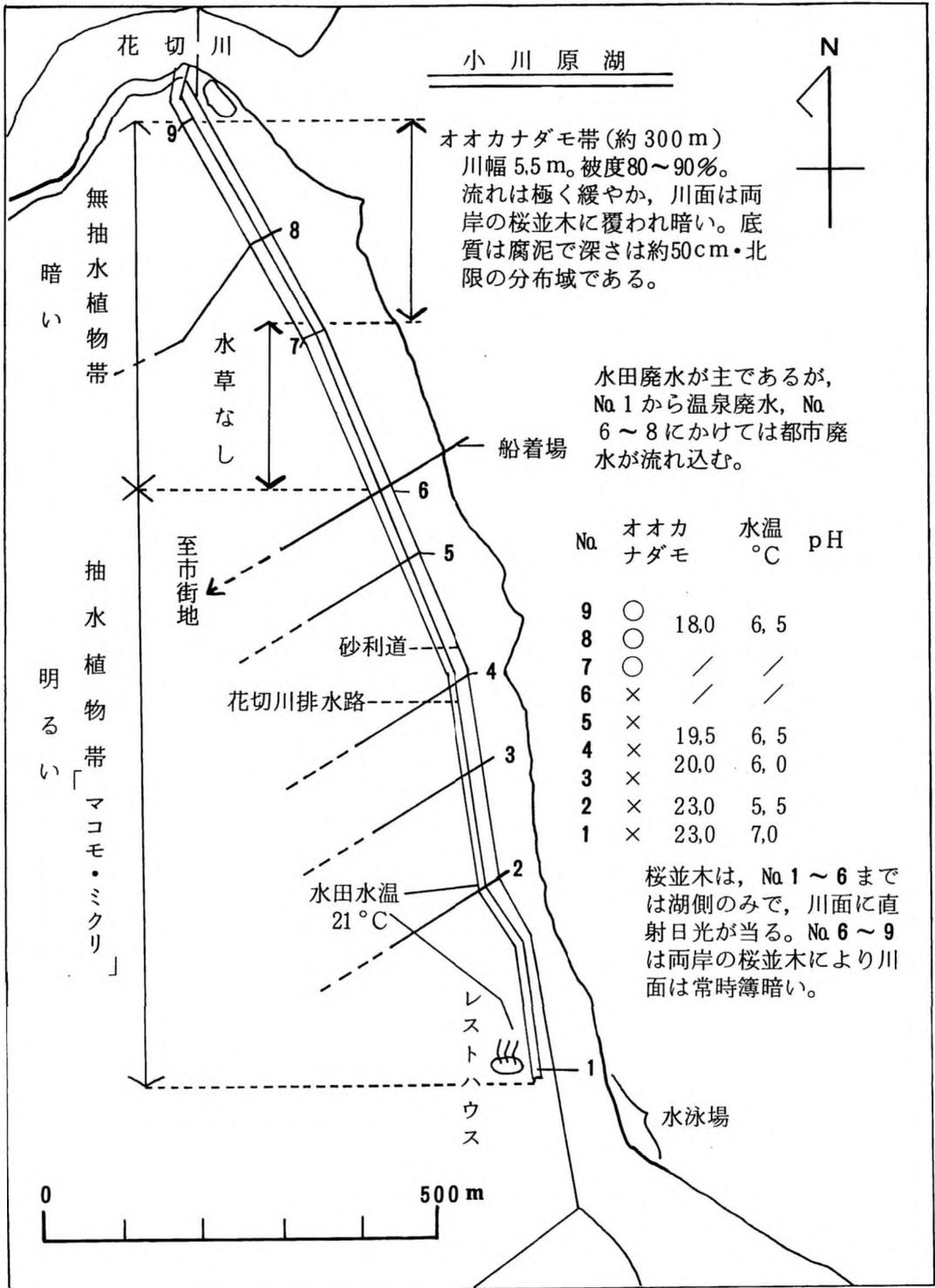


図2 オオカナダモの分布図

り、流の中にはマコモを優占種とする抽水植物が群落をつくる。植被率は50～100%で、ミクリ・ヨシ・ガマ・クサヨシ・コウホネ・アサザ・マツモ・セリ・オモダカが混生する。Na 6～9にかけては、両岸に並木があり、その枝が川面を完全に覆う。直射日光は桜並木により遮断され、川面には届かない。川面は暗く、セリとクサヨシが極く稀に散生する。沈水植物はオオカナダモ以外は無く、浮葉植物は分布しない。以上により花切川排水路は、抽水植物帯 (Na 1～6) と無抽水植物帯 (Na 6～9) に分けられた。無抽水植物帯 (約500 m) は、さらに無植物帯 (Na 6～7, 約200 m) とオオカナダモ帯 (Na 7～9, 約300 m) に分けられた。

水温について：水温はNa 1～9へと順に調べが進められた。時間は13時から16時半までの、3時間半に渡る。Na 1はレストハウスからの温泉排水の影響で、33.0℃と異常に高かった。参考に5 m程わきの、水田側溝の水温が調べられた。21℃であった。Na 2は23.0℃であった。すぐ脇の水田側溝の水温は、21℃であった。Na 2水温測定地点の2 m下流に流入する、水田用水路の水温は20.0℃であった。Na 3～4は20.0℃、Na 4～5は19.5℃であった。温泉の影響は、Na 2以後に及ばないと判断される。Na 3～4とNa 4～5の間にある、0.5℃の温度差は、夕方に近付く時間経過によるものであろうと判断される。Na 8～9は18.0℃であった。この時の気温は18.0℃、最寄りの小川原湖岸の水温は19.5℃であった。水は比熱が大であるので、急激に温度は低下しない。Na 8～9の水温が18.0℃と低いのは、一つの要因として、夕方へ近付く時間の経過が上げられる。もう一つ要因として、Na 6～7の200 mに渡り、両岸の並木により直射日光が遮断された薄暗い中を、ゆっくりと流れるうちに水温が低下したことが考えられる。即ちオオカナダモ帯へ流れて来る水の温度は、昼間においては常に何度か低下させられていると推論される。

その他：PHの測定も、水温の測定と平行して行なわれた。結果は図2の通りである。またNa 6～8にかけては、上北町の生活排水等が流入する。

整理および謝辞

オオカナダモ帯は、直射日光が当たらないことと水温が低いことにより、在来水草の生活できない環境条

件下に成立する。nicheの空隙を埋めるべく、帰化・定着したものと推定される。オオカナダモ帯が300 mに及ぶ純群落であることから、オオカナダモがここに定着に成功してから数年を経ていると推察される。

最後ではあるが、標本を同定下さり本稿を書くことを勧めて下された、大滝末男 (都立小石川高校) 先生に感謝申し上げる。

参考文献

- 左京沼研究グループ、1965、左京沼の湖沼学的研究 (予報)、下北半島総合開発計画策定に関する基礎調査報告書、資源科学研究所、東京。
- 青森県生物学会、1967～73、青森県植物分布図、第1～5集、弘前市。
- 石川茂雄・斉藤宗勝、1969・津軽地方の植物相・津軽国定公園指定促進協議会。
- 細井幸兵衛、1971、植物目録予報、むつ小川原開発地域天然記念物調査報告書、青森県教育委員会。
- 三沢市文化財審議会編、1971、小川原湖と自然、三沢市教育委員会、青森県。
- 大滝末男、1974、水草の観察と研究、ニューサイエンス社、東京。
- 尾駮・鷹架沼生態調査研究会、1976、尾駮・鷹架沼の植物相、尾駮・鷹架沼の植物群落、尾駮・鷹架沼生態調査研究報告書。(株)むつ小川原総合開発センター。
- 高谷 三郎、1976、植物リスト、津軽半島西北部山塊の自然調査概要、青森県立郷土館、青森市。
- 鈴木正雄、1978、弘前市付近の水辺、水中植物図譜、弘前生物談話会、青森県。
- 大沢達郎、1980、文献から見た三沢市被子植物仮目録、三沢高校研究紀要、青森県。
- 大滝末男・石戸忠、1980、日本水生植物図鑑、北隆館、東京。
- 成田和樹、1980、津軽のため池、ため池の植生、植物と自然、Vol. 14, No. 10、ニューサイエンス社、東京。